

平成二十九年 年頭之辞

二〇一七年、平成二十九年の最初の朝を迎えました。全国の会場に集われた会友の皆さま、新年明けましておめでとうございます。

私にとりまして、今まで迎えた元日の中でも、特別な元日を、こうして会友が相集い、心を一つにして新しい年の実践を誓い合う。このことに、今、心から慶びを感じているのでございます。

昨年、我が会は、「創立七十周年」と、「会長交代」という大きな節目を刻みました。その節を経て、私たちは今、新しい態勢で、新たなステージに立ち、次なる七十五周年の大節に向かって歩み始めたのでございます。

高浜虚子が、新年の訪れを詠んだ俳句に、
去年今年 貫く棒の 如きもの

倫理の新たな一歩を踏み出すことはできないのであります。

その足元を固め、今、私たちが取り組んでいる「改革」を軌道に乗せるためにも、「教え」に対する誤解や思い込みを正し、私たちが今、立っている場所を確かめ、進むべき方向を明らかにしなければなりません。

足元を固めるもう一つの手立ては、実践倫理宏正会という大きな組織の血のめぐりをよくして、会友が互いに一体感を持てるようにすることです。そうすることで、会に対する世の中の信頼感を高めることです。しかもそれを、すべての会友が気持ちの一つにして、オール宏正会として計画的に取り組むということです。

「棒の如く」とか、「足元を固める」とか申しますと、変わらないこと、守ることばかりに意識が向いていると思われられるかもしれません。しかし、それは違います。「変わらないために、変わりつつける」。すなわち、我が会がこれまでのやり方から脱皮するということなのです。自由闊達な意見交換と、自主自発の実践活動によって、実践本来の輝きや、楽しく澆刺とした会場の空気を、大いに取り戻そうということです。特に若い世代が中心となって、です。

そのためには、私たち一人ひとりが倫理実践の原点に

という句があります。去年から今年へと年は変わってゆくけれど、年を越えても、棒のように変わらないものが貫かれている、という意味です。現在の私どもの心境は、まさにこのようなものだと言つてよいでしょう。

「新しい」態勢、「新たな」ステージと、「新しさ」を強調しましたが、真新しい、特別なことを始めるわけではございません。

初代会長から名誉会長へと引き継がれた「実践倫理の教え」を、新たな心構えで真剣に学び直し、実践によって教えを深めていく。そのことを描いて、今、私たちが取り組むべき課題はございません。

我が会の七十年の歴史を貫く「棒の如きもの」。この本質を見極め、足元をしっかりと固めることでしか、実践

立ち返り、そのことで我が会がより一層、元気になり、これまで以上に活発な活動を展開しなくてはなりません。この元日の朝は、その覚悟を定める、最初の朝なのであります。

では、倫理実践の原点とは何でしょうか？

名誉会長は、これまで何度となく「楽しくなければ実践ではない」、「大いに実践を楽しんでいただきたい」と指導してこられました。

「実践を楽しむ」とは、実践本来の輝きを取り戻すことなのです。もし実践が、気の乗らない仕事のようなものだとなれば、楽しめるはずがございません。ましてや、指示待ちや強制されての実践では長続きもいたしません。このような実践が仕合わせの果実を結ぶことは稀でしょう。何よりもまず、実践は楽しくなければいけないのです。同じ実践をするなら、楽しくやろうということです。でございます。

しかし、楽しければそれでよいのかといえば、それだけでは不十分です。では、足りないものは何か。それは「喜び」です。喜びこそ、すべての実践の原点であります。

そこで、本年、最初の朝を、「実践を楽しみ」、その上で、「実践の喜び」を取り戻す。このことについて皆さ

まど考えることから始めたいと思うのです。

昨年(おととし)の十月、東京工業大学荣誉教授の大隅良典先生が、ノーベル生理学・医学賞を受賞いたしました。受賞の理由は、「オートファジー」の仕組みを発見したという事です。

オートファジーは、「自らを食べる作用」と書いて「自食作用」という意味だそうです。生物は生きていくために細胞のなかでタンパク質を作りつづけていかなければなりません。ところが作りつづけるなかで、時に異常なタンパク質が生じたり、いらなくなったゴミが出てきたりするそうです。その不要になったタンパク質を分解して、新しいタンパク質に作り替えるのがオートファジーのメカニズムです。

不要となった製品をリサイクルしてまた使用する——どうもそのような感じのことを、細胞の一つ一つがやっているというのです。

大隅先生がこのタンパク質の分解の研究を始めた時、世界の研究者の誰一人、オートファジーについて注目していなかったそうです。しかし先生は、誰も注目していないから、かえって面白いと、研究を始められたといえます。直感で大きな発見につながるかもしれないと感じられてはいたのでしょう。しかし、それがノーベル賞に

ところが現代社会は、何かをしようと必ずその成果を求める傾向にあります。それは何の役に立つのか、どのような成果があるのかという視点ですべての物事を評価しがちです。そして、成果につながらなければ、評価の対象から外されてしまうこともあるのです。

ですから、大きな成果をあげようと考える研究者は、大隅先生のおっしゃった、サイエンスにとつてもっとも大切な「面白い」「楽しい」という感情を抑えて、すぐに成果の出る研究へと走ってしまうのです。

しかし、科学にとつて、もっとも大切な好奇心や、自然の不思議さへの情熱を抑えて成果だけを求める研究が、果たして豊かな実を結ぶことができるでしょうか。自分の楽しみを抑えてする悲壮感ただよう研究が、果たして長続きするのでしょうか。

確かに結果や成果は大切です。蔑ろにするわけにはありません。しかし、それにこだわりすぎると自分を見失い、物事の本質を見失ってしまうのではないのでしょうか。

大隅先生は好きだからこそ四十年の間、研究に没頭することができ、それが大きな発見につながったのです。研究にしても、我々の実践にしても、好きだからです。というのが原点です。つまり、主体的な実践を自らが

つながるなどとは、夢にも思っておられなかったのではないのでしょうか。それでも先生は、四十年間、たゆまず研究をつづけてこられたのです。

何が先生の研究を支えつづけてきたのでしょうか？
いかなる情熱が、先生を研究に駆り立てたのでしょうか？

次のようにおっしゃっています。

「これが役に立つかどうかはわかりません。でも、自分が面白いと思つたので、夢中で研究したので」。「研究が面白いと思えることが、サイエンスではもっとも大事なことです」。つまり、研究への純粋な喜び、発見への好奇心をエネルギーにして、楽しむことが大切なのだ、とおっしゃっているのです。

私は、そのお言葉に、我が会の実践を重ねました。我が会の実践もまた、楽しみや喜びが命だからです。今ある自分を、さらにより善く向上させたいという気持ちで、エネルギーとして、教えの実践を楽しむ。すると、日々、少しずつ自分が善い方向へと変わってゆく。この「永久実践」を喜びとすることが大切だということです。

オートファジーのメカニズムに倣つていえば、不要となった不自然な心を、教えの実践でリサイクルして、また「朝の誓」の実践に生き貫くということであります。

楽しむということ。だからその先に、喜びと成果があるのです。

我が会では、主体性の大切さについて「随所に主となれ」と説いております。いつ、いかなる時でも、主体的に取り組む大切さを忘れてはならないということです。成果の奴隷になつてはいけません。

大隅先生は、「科学の本質は楽しみである」と言われましたが、要するに「科学は主体的な取り組みなのだ」とおっしゃっているのです。主体的にやるから、楽しいのです。我が会の実践も、自分のやりたいことを、もちろんそれは倫理にかなうものでなければなりません。主体的に選び取つて実践する。主体的に取り組むからこそ楽しみがあり、喜びが生まれるのです。実践は、人に言われてするものではありません。自分の成長のために自ら進んでするものです。

しかし、自分が実践の主役になっただけでは、まだ実践を心から楽しみ、喜びとすることはできません。その先にある「人の仕合わせのために実践する」ことが必要となるのです。周囲の人びとを明るく元気にして、笑顔にして初めて、自分の喜びが人の喜びとなり、人の喜びが自分の喜びとなって返ってくる「仕合わせの循環」、つまり楽しさをこえた「喜びの循環」が生まれるのです。

私たち人間は、一人では自分の喜びを見出したり、探し出したりすることはできないようにつくられておりません。

ですから、自分以外の誰かが、自分がすることを喜んでくれる。その自分以外の誰かが喜ぶ姿が、自分にとっての喜びとなる。これが、私たちの実践にとつての「真の喜び」です。実践による「真の喜び」とは、「誰かを楽しませる楽しさ」なのであります。

生物の教科書に、遺伝の法則で登場するメンデルは、今でこそ「遺伝学の父」などと呼ばれていますが、当時は無名のアマチュア科学者にすぎませんでした。家が貧しかったことから研究者にはなれず、修道院に入つて、その庭で多くのエンドウ豆を育てて遺伝の研究をしました。

エンドウ豆の花の色や形が、次の世代にどのように受け継がれていくのかを、八年の歳月をかけ、六世代にわたつて観察しました。こうして、「メンデルの法則」と呼ばれる、遺伝の法則を発見したのであります。

しかし、その成果を公にすると、評価する人もおりませんが、ほとんど注目されることもなく、やがて忘れ去られてしまいました。彼がこの世に生きている間、彼の発見した法則が認められることはなかったのです。

研究であろうと、我々の実践であろうと、それを行う楽しみや喜びの感情の根底には、人々の役に立ち、喜んでもらいたい。苦難や試練に立ち向かう人、逆境下にある人の助けになりたい。いまだ見えざる未来の人々と、未来の社会をよくしたい、という願いが込められております。

そばに苦しんでいる仲間がいれば、その苦しみを共有し、相手を思いやるのが実践倫理です。口で「苦難福門」を唱え、いくら教えを学んでも、そばに居る仲間の苦難に無関心で、寄りそうことができないのなら、何のための実践倫理ぞ、ということになります。

悩み、苦難の中にある相手を思いやることで、「ああ、仲間がいてよかった」と喜んでもらえること。そして、その喜びが、自らの喜びとなつて返ってくること。「実践の喜び」とは、そのような「心の循環」から生まれてくるのです。

私たちは、自分の「居場所」を持ってなければ、安心して穏やかに暮らすことはできません。では、そうした「居場所」は、どのようにして手にすることができるのでしょうか。

我が会では、こう考えます。私たちが実践できるのは、私たちが実践できるように、あらゆる人々が支えて

では、メンデルは不幸で悲しい人生を送つたのでしょうか。決してそんなことはありません。晩年の彼は、こう語つていたといひます。「植物の観察は、私に大きな満足と喜びを与えてくれた。今は認められなくても、それほど遠くない将来にきつと世界が認めてくれるだろう」

ここで私が申し上げたいことは、好きで主体的に選んだ生き方は、仮に人に認められなくとも、褒められなくとも、その楽しさや喜びは、いささかも損なわれることはないといひます。逆に言えば、人に認められても、褒められても、いかなる称賛も、本当の意味での楽しさや喜びにまさるものではないといひます。

彼は観察を楽しむ、喜びとしていました。それだけで満足していたのです。いや、彼は、自分の研究が人の役に立つと確信して、深い喜びを味わつていたに違いありません。しかし、残念ながら彼の研究を理解できる人は、同じ時代にはいなかったのです。にもかかわらず、彼はいささかも寂しくはなかった。時が経てば、いつかきつと自分の研究を理解し、そこからさらに研究を深めてくれる人が現れるに違いないと信じていたからです。彼は決して一人ではなかったのです。未来に見えざる仲間を持つていたのです。

くださつていからだと。だから、心置きなく自由に思うさま実践できるのです。とするならば、私の実践も、今、直接誰かのお役に立つといひことはないのでありません。しかしながら、私があらゆる人々に支えられているように、私も実践を通して誰かを支えているのです。だからこそ、自分の実践を喜び、楽しむといひその中に、自らの「居場所」を見出すことができるのではないのでしょうか。

私の実践が、人々を楽しませ、誰かを喜ばせ、仕合わせにしていると思えば、それがいかにささやかな実践であろうとも、多くの人々の役に立つていひます。それだけで実践の喜びが湧いてくるはずであります。

では、そもそも「実践の喜び」とは、何なのでしょう？ 皆さんの学生時代の部活動を思い出してください。当時、「楽しかったか」どうかお尋ねすれば、多くの方が「辛いこともあつたけど、いま考えると、楽しかった」とお答えになるでしょう。この感覚こそが、「実践の喜び」の本質なのです。

運動系の部活動の大半を占めるのは練習です。活動時間の実に九割近くを練習に費やします。練習と試合ではどちらが楽しいか？ 当然、試合に決まつております。つまり、楽しい試合は全活動時間のたつた一割しかない

のです。

さらに言うと、仮に試合に出たとしても、チームプレ
ーの競技では、自らが主役となる時間はごく僅かです。
これらを合わせて考えると、部活動に使っている時間の
ほんの数パーセントしか、個々のメンバーが楽しいと思
える時間は存在しないのです。

その上、その貴重な数パーセントの時間に失敗をした
結果、負けたとなればまったく楽しくありません。つま
り、部活動に費やしている時間のうち、自分が活躍でき
た時間しか楽しくないとしたら、それは全体のゼロコン
マ数パーセントという、きわめて短い時間でのことでし
かなくなるのです。しかし、それでも部活動をしていた
人は、「楽しかった」と思っているのです。これは、運
動系に限らず、あらゆる部活動に共通の感覚ではないで
しょうか。

このように、長く地道な努力の果てに、ほんの一瞬し
か楽しいことはないけれど、それでも「いま考えようと
楽しかった」と感じられるところが、実は部活動と、倫
理実践が共通している点なのです。それは、辛さや厳し
さを乗り越えた先にある、充実感や満足感、達成感に支
配された感情によるものでしょう。

部活動に限らず、仕事や勉強、はたまた家事にして

す。

それにもかかわらず、皆さんは、「倫理」という言葉
にとられ過ぎて、「実践」をとんでも硬くこわばったも
のとしてイメージされてはおられないでしょうか。

「倫理」を、守らねばならない義務としての社会の規範
や、規則という側面だけで理解しているとしたら、それ
は大きな間違いです。我が会の「倫理」は、「大自
然の摂理」が指し示す、すべての人間を貫く普遍的な「教
え」なのです。人間は、かく行い、かく生きるのがもつ
とも自然な姿であり、そのように生きれば仕合わせにな
れるという「生きた教え」なのです。

だからこそ、「道徳」の徳目のように、それを金科玉
条として頑に守るというのではなく、自分の自由な意思
で大らかに楽しく、喜びをもって実践していただきたい
のです。「好きこそもの上手なれ」と申しますが、自
分から「やってみたい」という気持ちに押されたもので
なければ長続きいたしません。長続きしないものは、ど
こか「不自然」で「ゆとり」がなく、結局、「本物の実
践」にはならないのです。

今、私たちが立っている新しいステージでは、「大ら
かな考えと柔軟な発想で、しなやかな実践」が求められ
ているのです。そうでなければ、倫理の実践という「楽

も、日々の実践は、基本的には辛く、地道な作業であり
ます。嫌だからといって投げ出すことは許されません
し、逃げ出すわけにもまいりません。辛抱と我慢の日々
が求められます。さまざまな人間関係にも翻弄され、思
い描いたとおりの結果にたどり着くことなど皆無に等し
いでしょう。

そうであつたとしても、ただ、今なすべきことを丁寧
にきちんと着実に実践するだけなのです。しかも、それ
を主体的にすることで、そこに楽しみと喜びを見出すの
です。

わずかな楽しみを通して、相手から感謝されたり、
頼られたりすることがある。このような、たまにある嬉
しいことが、その一瞬の「喜び」が原動力となつて、
実践をつづけることができるのです。「辛さ」の裏
側には、必ず「喜び」があるのです。

何事によらず倫理の実践は、楽しいものなのです。喜
びをもたらすものなのです。実践を難行苦行にとらえ、
実践を楽しむことができなければ、倫理そのものまで歪
めてしまいかねません。

なぜ倫理の実践は楽しいのか。それは、実践が人と人
との愛和をもたらし、すべてがより善く変わっていくか
らです。人格が磨かれ、人間としての幅が広がるからで
しい生き方」を貫くことも、「実践による喜びの果実」
を収穫することもできないのであります。

今日までの我が会を支えてくださった先輩諸賢は、ま
さに喜んで実践し、「楽しい」生き方を貫き通してこら
れました。それが、現在の我が会の礎となつたのです。
「楽しみ」も「喜び」も、我が会の「実践の原点」なの
です。

自分の喜びと人の喜びが結び合う「我も人も仕合わせ」
を実現すること、これが、次の大節に向かう私たち
共通の実践課題です。

皆さん、本一年の実践を楽しみましょう。皆さんの倫
理力で実践を楽しみましょう。

「楽しくなければ実践ではない」「喜びがなければ倫理
の実践ではない」と申し上げ、会長として初の年頭のご
挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

平成二十九年元旦

会長 上 廣 哲 治